

---

---

# バルトン賞と久保起記念賞について

---

---

## 第1章 バルトン賞

### 第1節 創設の経緯

文化研は、2006年11月「W.K.バルトン生誕150年記念事業」を完遂した実行委員会から「バルトン記念事業及び日英民間交流の継承」を託され、記念事業の余剰金20万円を基金として引継いだ。実行委員会は、かくして事業整理を終え、成功裏に解散した。

文化研運営委員会は、引継いだ基金にほぼ同額の基金を上積みし、総額44万余円の「バルトン基金」を設けることに決し、翌年（2007年）の総会で議決した。

バルトン賞は、このバルトン基金を基に、わが国の「衛生工学の祖」バルトン先生の業績を未来に伝えることを目的に創設された。バルトン賞の授与対象は、次の三つである。

- ① バルトン先生の遺徳を語り伝えている地方自治体
- ② バルトン先生に関する優れた研究を行った人
- ③ 「日本のバルトン」として海外技術援助に優れた仕事をしている人

バルトン賞の内容は、表彰状と副賞としてガラス製の特製記念盾及び鳥海幸子画伯の日本画を恒例とした。

鳥海画伯は、バルトン先生の曾孫で、川端龍子賞を受賞したことのある日本画家である。特に「桜の絵」には定評があり、「桜の画家」と讃えられる名手である。バルトン先生のご家系は絵画の才能に恵まれた方が多く、バルトン先生ご自身が日本の写真界の発展に貢献されたのも天性の芸術的才能に負うものであろう。先生が日本に遺した愛嬢で一人娘の「多満」女史もまた、日本画の才能に恵まれ、伊藤深水の愛弟子であったという。文化研は、鳥海画伯にバルトン賞授与の都度、日本画の製作を依頼したのだった。

### 第2節 バルトン賞の授与

#### (1) 第一回バルトン賞及び感謝状贈呈

第一回バルトン賞は、下関市上下水道局が受賞した。表彰式は、2008年5月10日、日本水道協会の会議室で挙行された。バルトン賞選考委員長は、小林康彦氏（故人）で、2006年9月に結成された「バルトン記念英国訪問団」の団長を務めた水道界のご意見番である。

下関市は、バルトン先生が提案した緩速濾過池で処理した水道水を“あぁ、関露水”と名付けてボトル水として販売し、バルトン先生の肖像写真を使った美しいラベルを貼って、先生の遺徳を市民に伝える努力をしていた。下関市は、上水道事業創設以来、いわばバルトン水を誇りとして来た。下関市は、先生の関わった歴史的側面を掘り起し、内日第一貯水池など多くの水道施設が登録有形

文化財として国の指定を受けていた。下関市当局は、選考委員会の申し出を快く受け入れ、ここに授与が決まったのである。

鳥海画伯も下関市のために快く絵筆を取り、新作の日本画「湖北の桜」が副賞となった。

表彰式では、江島潔下関市長がメッセージを寄せた。その中に次のような含蓄に富んだ一文がある。この際、紹介しておきたい。

「バルトン氏の設計した水道システムは、自然を最大限に利用しつつ、自然環境に全く影響を及ぼさない無為自然の思想で、現在私達が抱えている環境問題に大きなヒントを与えてくれる」

この言葉は、バルトン先生を下関市の上水道事業の祖として尊敬する江島市長の率直な気持ちであろう。

第一回の表彰式では、バルトン賞とは別に小林ユカリさんに感謝状を贈呈した。

小林ユカリさんは、東京パイプバンドのバグパイパーで、恒例のバルトン忌ではバルトン先生の墓前でスコットランドの古楽器バグパイプで“Scotland the Brave”や“Amazing Grace”を演奏していただいた。文化研としての心からの感謝の記（しるし）であった。



鳥海幸子さん作の日本画「湖北の桜」を手にされる  
下関市吉武上下水道管理者

(出典：「ふくりゅう」平成20年5月23日通巻56号)



バグパイプと津軽三味線のコラボレーション  
(右からケビンメッツさん、小林ユカリさん、新田昌弘さん)

## (2) 第二回バルトン賞

第二回バルトン賞は、2006年9月に開催された「バルトン生誕150年記念事業」の内、バルトン先生の故郷エディンバラでの事業の実現に貢献したアラン・ウイルソン氏とヘリオット・ワット大学のアン・ジョンズ女史に授与された。

表彰式は、「W.K.バルトン記念日英交流事業2009」の一環としてエディンバラで行うことにし、酒井彰文化研代表を団長とする英国訪問団を組織した。この時、日英交流事業としては、2006年に建立したバルトン先生の記念石碑の側に大理石のベンチと桜の木2本を贈呈した。表彰式は、この交流事業の一環と位置付けられたのだった。

ウイルソン氏は、生誕記念事業のスコットランド側協力委員会のオーガナイザーとして記念石碑建立や講演会などの記念事業の実現に努力を惜しまなかった。ジョンズ女史は、バルトン先生の叔母メアリー・バートンの研究者として有名な方で、ウイルソン氏と共に記念事業実現に努力された。文化研としてその功に報い、日英民間交流をスムーズに進めたいと言う思いが授与という形になった。なお、余談だが、メアリー・バートンは、同大学最初の女性理事であり、また女性の権利擁護に努力した指導的な人物であった。

表彰式は、2009年9月12日午前11時半、ナピア大学クレイグロックハート・キャンパスの講堂で厳粛に行われた。副賞は、鳥海画伯の日本画「胡蝶」（掛軸）であった。

## (3) 第三回バルトン賞

第三回バルトン賞は、『(現代語訳)バルトンの日本10都市衛生状況報告書』の著者栗田彰氏が受賞した。栗田氏は、本会の会員として下水文化の普及・啓発に健筆を振るい、極めて興味深い著作『川柳・江戸下水』（下水文化叢書、1995年）、『江戸の下水道』（青蛙房、1997年）、『江戸下水の町触集』（下水文化叢書、2006年）などの著作を次々と発表された。

上記の現代語訳もその一環で、バルトン先生が日本国内で手掛けた28都市の内10都市の衛生状況と対策の処方箋をまとめた報告書である。バルトン先生が衛生改善を目指す都市の現実を介して自分の講座の学生達とどのように向き合い、衛生改革の精神と技術を伝えようとしたのかが生き生きと伝わって来る。内容は、誠に地味けれども、貴重な作品である。文化研は、栗田氏のそのご努力とご健筆に敬意を表したのである。

## (4) 第四回バルトン賞

第四回バルトン賞は、初めての試みとして受賞対象論文を「第12回下水文化研究発表会」の応募論文の中のバルトン賞応募論文から最優秀論文を選考して授与することにした。

バルトン賞応募論文は4編だったが、選考委員会（委員長・石田雄弘評議員）の審査の結果、下記の論文に授与した。

「バン格拉デシュにおけるエコロジカル・サニテーションの普及：その実証分析」

著者：エコサン・チーム・オブ・バン格拉デシュ、発表者：アブダラ・アル・マムン

応募論文の内下記2編は、現地の人々と共に考え、取り組んだ経緯を詳述した作品で、極めてユニークであり、海外技術援助の遂行に参考になると評価されたので、佳作として特別にバルトン記念賞（佳作）を授与することにした。

① 「タイ・山岳民族子供達と取り組む衛生改善活動」、島田正敏氏

② 「南スーダンにおける日本の水道技術協力の手法に関する考察」、佐藤弘孝氏

バルトン先生は、130 余年前、コレラで苦しむ日本の人々の救済に努力した。今では、日本の青年達が「日本のバルトン」たらんとして発展途上国で努力しているのである。

表彰式は、2013年11月9日(土)、下水文化研究発表会が開かれた日本水道協会会議室で行われた。なお、2015年11月21日(土)に開催された「第13回下水文化研究発表会」では、バルトン賞の該当作品が無かった。文化研にとって不幸な出来事は、小林康彦氏の急逝であった。故小林氏は、バルトン生誕150年記念事業の実現に貢献し、その後も文化研の事業を指導された大先達であった。そこで、バルトン記念感謝状を贈呈した。

#### (5) 第五回バルトン賞

第五回バルトン賞は、バルトン生誕160年を記念して2016年8月6日(土)、主婦会館プラザエフで開催した「バルトン生誕160年記念式典」で長岡造形大学の平山育男教授に授与された。平山教授は、当時の新聞各紙に掲載されたバルトン先生の動静を克明に調査し、建築学会誌に連載された。さらに、バルトン先生の主著『都市の給水』(英文)の全文の翻訳を監修し、先の活動状況と合わせて580頁余の大著『都市への給水—W.K.バルトンの研究—』(中央公論美術出版、2015年11月)を発刊した。この作品により、バルトン先生に関心のある人達が容易に先生の考え方にアプローチ出来、さらに来日から東京で没するまでのおよそ13年間の動静を知ることが出来るようになった。平山教授の動静調査は、全国の地方紙にも及ぶ徹底したもので、バルトン先生の活動状況を生き活きと復元している。

#### (6) 第六回バルトン賞

第六回バルトン賞は、2017年11月18日、新宿区ボランティア・センターで開催された第14回下水文化研究発表会で授与された。石井氏は、「日本のバルトン」と言うに相応しい人物である。長年に亘り数多くの開発途上国の社会開発プロジェクトに携わったが、中でもバングラデシュのダッカ市に於いて住民参加型の新しい廃棄物管理モデルを根付かせた功績が評価された。石井氏は、一連の活動をまとめた『グリーン・ダッカ・プロジェクト』(JICA研究所出版)を発刊した。表彰式当日は、石井氏本人は海外出張中であったため、代理の石井百合子夫人に表彰状、記念の盾及び鳥海画伯の日本画・桜『蒼』が贈られた。石井夫人は、夫君のメッセージを朗読したが、その中に次の一文があった。

「コンサルタントとして10年間(海外で)活動して来ましたが、常に考えていたことは、問題の解決を“技術的解だけに求めず、社会や文化に根差した解を探す”ことです。1988年頃から今まで、様々な事を下水文化研究から勉強させていただきました。(略)。たぶん、下水文化研究会の培っている考え方や精神が自然に身についていたと思います。(以下略)」

まさに、「日本のバルトン、ここにあり」という言葉ではないだろうか。

## 第2章 久保起記念賞

### 第1節 創設の経緯

久保起記念賞は、2012年4月1日永眠した久保起氏の業績を語り伝えるために創設された。久保氏は、現代の下水道制度と行政の確立者であると同時に、文化研の活動を支援された。文化研にとって、久保氏のご逝去は、一大ダメージであった。

久保氏は、その最晩年、筆者（稲場）に宛てた私信を幾通も書き遺したが、私信は現実には郵送されず、久保氏の手元に置かれたままであった。筆者は、これらの私信を没後、久保夫人から手渡された。

私信の全てを読んだ筆者は、内容がある種の自伝であると直感し、「久保起自伝」の企画編集を決意した。久保氏が手紙を介して直接語り掛ける内容だから、それは切迫感に満ちた作品になった。かくして『遺稿 久保起自伝—熊蜂のごとく—』（2012年11月）が水道産業新聞社の協力で発刊された。

久保起記念賞の財源は、この著作の印税である。水道産業新聞社は、筆者の意図を多とし、発刊と同時に印税の全額約40万円を文化研の口座に振込んだ。これは、一重に久保氏の人徳によるものであった。文化研は、この印税を受け入れるために「バルトン基金」の名称を『久保起・バルトン記念基金』と変更した。

久保起記念賞は、「下水道界を活性化させる政策ヴィジョンを提起した人」に授与することになった。この方針は、最晩年、「わが国の下水道事業の将来を深く憂慮した」久保氏の意向に沿うためである。

### 第2節 久保起記念賞の授与

#### (1) 第一回久保起下水文化賞—佳作賞となった—

第一回久保起記念賞は、第12回下水文化研究発表会（2013年11月9日開催）の論文応募に当たり久保起下水文化賞選考対象論文として応募された論文を選考委員会が審査して選定した。応募論文は3編であったが、いずれも独創性や水環境に関わる計画や事業の変革に対する寄与度などで一定の水準に達していないと評価され、最終的に「該当者なし」と言う結果になった。ただ、下記の渡辺論文は、今後の下水道行政にとって時宜を得たものと評価され、佳作賞を授与することになった。

渡辺勝久著「下水道事業経営の処方箋（事業者の意識改革）」

渡辺氏には、表彰状、記念の盾、および副賞として金一封（3万円）が授与された。渡辺氏の受賞の弁の中に胸に染み入るような次の言葉がある。敢えて記録しておきたい。

「財政難に喘ぐ多くの自治体の方々に一石を投じ、奮い立っていただきたいと思い、投稿しました。私の論文が佳作に値したことは、世情を反映したものと受け止めます。また、私のコンサルタントとして30年携わった成果に対する評価がなされた証でもあり、とても大切な賞として家宝にしたいと思います。」

#### (2) 第二回久保起下水文化賞—佳作賞となった—

第二回久保起記念賞は、前回同様の手続きにより第13回下水文化研究発表会（2015年11月21



久保起記念特別賞  
西堀清六氏



バルトン記念賞・久保起記念特別賞の副賞  
バルトンの曾孫である日本画家鳥海幸子さんが描か  
れた「朝顔」、「芙蓉」

(出典：「ふくりゅう」88号、2016年8月26日)

日開催)の応募論文から選定したが、最終的に「該当者なし」という結果に終わった。ただ、下記の  
椿本論文は、今後の下水道行政に示唆する所があると評価され、佳作賞を授与することになった。

椿本祐弘著「総合的水管理へ向けての上下水道事業運営体制」

### (3) 第三回久保起下水文化賞－特別賞と奨励賞－

第三回久保起下水文化賞は、2016年8月6日主婦会館プラザエフで開催された「日本下水文化  
研究会30周年、バルトン生誕160年記念式典」において久保起記念特別賞及び同奨励賞として下  
記により授与された。

特別賞は、西堀清六氏が受賞した。西堀氏は、文化研創設時から評議委員会議長として文化研の  
発展に尽力した。西堀氏は、久保氏とは強い絆で結ばれた、いわば久保氏の同志と言える人物であ  
る。また、西堀氏は、バルトン先生に対する篤い思いを抱かれている。そこで、表彰状と記念の盾  
の他、副賞として鳥海画伯の日本画「芙蓉」が贈呈された。

奨励賞は、「水循環基本法フォローアップ委員会」に対して贈られ、同委員会を代表して座長の  
沖大幹東大教授(生産研究所)が受け取った。奨励賞では、同委員会の活動費に充てて欲しいと言  
う思いから副賞として金30万円が授与された。これは、『久保起・バルトン記念基金』からすれば  
思い切った金額であったが、故久保起氏の遺志に沿うものと判断した結果であった。

(稲場紀久雄、酒井 彰)